

# 論文内容要旨

論文題目

「脳下垂体腺腫の MRI 所見と病理組織学的所見による  
再増大予測因子の検討」

責任講座：脳神経外科学      講座

氏      名： 伊藤美以子

【内容要旨】（1,200 字以内）

< 背景 >

下垂体腺腫は、残存しても腫瘍の再増大までの期間が長く、可及的な摘出でも機能予後は良好に保たれると考えられ、従来より無理な摘出は行われず低侵襲な手術とされて来た。一方、近年、神経内視鏡の導入や手術周辺機器の開発などにより術操作の幅が広がり、積極的に摘出が行われるようになって来た。しかし、海綿静脈洞内の腫瘍摘出に際しては血管や神経の損傷により致死的合併症や quality of life(QOL)の低下を生じる危険性はむしろ高くなっており、腫瘍をどこまで摘出するかについては、未だ一致した見解は得られていない。この問題について考えるためには、残存腫瘍の再増大に関して、その予測因子も含めた検討が必要である。なお、過去の検討では MIB-1 labeling index (LI)以外は一定の傾向が認められていない。

今回、私はこれまでには行われていない病理組織学的および MRI の T2 強調像の描出パターンという観点から、下垂体腺腫の再増大の予測

因子を検討したので報告する。

#### <対象と方法>

2008年7月から2014年3月までに当科で経験した下垂体腺腫の手術症例のうち、MRI及び病理組織像の評価が可能な79例を対象とした。T2強調像の所見は特徴的な4つの傾向(salt & pepper type、rain drops type、homogeneous type、heterogeneous type)に分類し、79例及び残存29例における臨床像、MRI所見、病理組織学的所見について検討した。

#### <結果>

T2強調像の所見から homogeneous type は salt & pepper type・heterogeneous type より間質量が有意に少なく、homogeneous type は salt & pepper type より MIB-1 LI が有意に高かった。また、増大群で MIB-1 LI が高い傾向にあり、間質量が有意に乏しかった。

#### <考察>

T2強調像の homogenous type は間質量が少ないものが多く、MIB-1 LI が高かった。また、間質量の乏しい症例は再増大する可能性が高く、再増大の予測因子となりうると考えられた。

#### <結論>

病理組織学的に間質量が再増大の予測因子として有用であることを初めて明らかにした。また、間質量を評価する MRI の撮像方法を工夫する事で T2 強調像と合わせ MRI 所見で再増大を予測できる可能性が示唆された。